

小さなぬくもりとともに

雪積もる朝、母が逝った

痛みも苦しみもなく、微笑みながら眠るように
よかった。と思いながら

どこか深い奥から、あたたかい涙が突き上がってくる

それは、一人ふるえていた夜

母が傍らにいて、残してくれた遠き日のぬくもりだった

とうに動けなくなっていた母を支えてきたつもりでいた

けれど、あの夜の小さなぬくもりに

今も今までも、あたためられ続けてきたのだということ

とめどなく突き上がる涙がおしえてくれた

支えられてきたのは、わたしのほうだった

人はだれも深い奥に、誰かがおいたぬくもり、彼方の人が見出した光をもっていて

気づかずともいつも、それにあたためられ、照らされながら、生きているのかもしれない

今このときも、これからも、このぬくもりとともに生きていこう

そしていつか、一人ふるえる誰かの傍らに

そっとぬくもりをおくことができたなら